

# ジンメルの女性論の研究（四）

石 塚 勝 雄

## 十 一

本節は男の悲劇について述べたものである。

『男<sup>(註)</sup>』にとっては、有限の行為（仕事）と無限の要求との関係が悲劇そのものである。この無限の要求には二つの側面がある。自我が自分の外に出ようとし、ただ創造しつつ生きて自分の存在を認めさせようとするかぎりにおいて、この要求は自我に由来する。この動作においては、その志向からしてもともと限界というものが問題にならないのだ。もう一つの側面は、自己の実現化を要求する客観的理念の側にも何らの制限が成立しない。どんな仕事のうちにも完成という絶対性が観念として置かれているからである。さてしかし、この二つの無限性が互いに衝突し合うため、到るところに諸々の制止が起こる。純粹に自分の内部から出たものであり、どんな制限もどんな尺度すらも意識していない主観的なエネルギーは、そのエネルギーが外界に呼びかけて、この世界のうちに一つの客体を創造しようとする瞬間において、自分の限界にいくわすのである。それというのも、あらゆる創造は世界のもろもろの力との妥協においてのみ可能なのであり、われわれがそうであるところのものと事物がそうであるところのものとの合成物であるからである。純粹な思想の形成物でさえも、それ自身においては何の形式もなく、滔々<sup>とつ</sup>と流れている精神的な力が、論理・事物の状態・言語などの必然性によって限界づけられていることを示しているのだ。

る。仕事という觀念そのものも、仕事というものが、精神のもろのもろの力と、その實現化において必然的に有限であるもろの力とによってのみ作成され得るものであるという点で、制限と有限性を蒙っているのである。<sup>(註二)</sup>男の行為（仕事）が有限であることが、人間の地上の生命が有限であることからくるだけではなく、種々の限界にぶつかる事情は以上引用の後段で述べられている。一方男の無限の要求には二つの側面があるという。一つの側面は自我が創造（生産・仕事・学問・創作などを含む）によって、自分の存在を認めさせようとするかぎりにおいて、この動作にはもともと限界がない、とジンメルは言う。よく「人間の欲望は無限である」と言われるが、それがこうした方面にも現われているのであろうか。もう一つの側面は、自我の實現化を要求する客觀的理念の側にも何らの制限がないという。『この二つの無限性が互いに衝突し合うため、到るところに諸々の制止（Hemmungen）が起る』とは理解が困難であるが、平易に言えば、二つのものが追いつ追われつの無限の追求・競争に終始する悲劇の様相を述べたものであろう。

つぎは男性における妥協（Kompromiss）の悲劇である。男の内部から出た主觀的なエネルギーは、結局は外界に呼びかけて、生産とか仕事とか創作とかの客体を創造しようとすることになるわけであるが、それが可能であるためには世界の諸力と妥協しないわけにはゆかないという悲劇である。『世界の諸力』とは、外界の事物との關係、社会的な勢力關係、人間關係などをも含むであらう。『純粹な思想の形成物』とは、文芸・思想・学問・芸術などの作品を指すのであろうが、このような場合外界の諸力との妥協などは必要がなさそうに思えるのであるが、そうした作品の意味を傳達するためには、既成の論理・既成の言葉を用いなければならないという制限を受けるから、そこに必然的に妥協が生ずるわけである。『事物の状態』（Sachverhalte）とは、芸術家などの場合に素材が限定されているので、それが素材との妥協を意味するといふのであろう。この辺りのジンメルの思考は徹底を極め、眞の哲學者らしい面影を偲ばせるものがある。要するに男は眞に男らしく生きて、自分の思いを遂げようとしても、そのためには必然的に外

界の諸力と妥協せざるを得ない運命におかれており、卑俗に言えば、いい加減などところでお茶を濁して生涯を終わらざるを得ないところに、男の悲劇の根本の様相があると言えよう。

なお、男が女に対して二つの無理な注文を出し、その一方の満足を得ながらそれを当然のこととし、もう一つの注文の方は充たされない不満を嘆く男の悲劇については、すでに本研究第四節の二で述べた。(註三)

本節は男の悲劇を論理的に展開しているわけであるが、それはジンメル自身の体験からにじみ出たものと思われるので、ジンメル自身に即して少しく考察してみよう。ジンメルはその六十年の生涯において、広汎な分野にわたる数々の労作を遺した。その範囲は、哲学一般・生の哲学・宗教哲学・歴史哲学・道徳哲学・文化哲学・芸術哲学・社会学等々に及んでいる。それを想うにつけても、前述の『有限の行為と無限の要求との関係』から生ずる男の悲劇を自ら意識し、自ら体験したことであろう。

また妥協とは対人関係・対社会関係の間にのみ起り得る、とわれわれは考えがちであるが、著作のような『純粹な思想の形成物』でさえ妥協の産物であるとジンメルは言う。これは自分の思想を純粹に伝えようとしても既成の言葉を用いざるを得ない苦しみ、つまり自分の思想そのものが歪められる・言葉との妥協が行われる体験から出たものであろう。ジンメルが数え年六十一才のとき肝臓癌にかかり、余命六ヶ月しかないとい医師から答えられてからも、畢生の著『生の直観』(Lebensanschauung, 1918)の完成に努力したが、この常識的には痛ましい悲劇も、汎男性的な悲劇として素直に受け取る心境であったのではなからうか。というのは、彼は「古代の哲人の如く従容として」死にいたいと言われているからである。

以上ジンメルの論述には疑問がないでもない。以上の論理は作家・学者・思想家、広く言って一般に知識階級、および政界・実業界などで活躍中の人物には、よく当てはまるでもあろう。しかし、その他の農業労働者・工場労働者など男性の大半、広く言って平凡な一般大衆の男たちは、どういうことになるのであろうか。例えば、彼等は彼等な

りに、農事改良とか農業生産の向上とか、農民運動とか労働運動とかプロレタリアートの解放運動とかの無限の要求にかられて行動しているから、前述の男の悲劇の論理がそのままではまるというのであろうか。彼等の大半は二元論の分化も明確ではなく、素朴的に行動していると言えよう。ジンメルはこの<sup>あた</sup>辺りの論述には知識階級の男女両性論の臭味が漂っているように思われる。この辺りにも、ジンメルは、G・ルカーチ (G. Lukacs) によれば、「帝国主義的利子寄食者のイデオログ」<sup>(註四)</sup>だとか、阿閉吉男氏によれば、「ヴィルヘルムのドイツのもとの中間層的インテリゲンチアのイデオログ」<sup>(註五)</sup>だとかいう唯物論的批評が生れてくる根源があるのではなからうか。

(註一) 『 』に囲まれた箇所が原文のままを拙訳した部分である。

(註二) G. Simmel, Philosophische Kultur, Leipzig, 1911, S. 80ff.

(註三) 神戸女学院大学論集、第十三巻、第一号、一七頁。

(註四) 阿閉吉男『ジンメル』有斐閣、昭和三四年、八六頁。

(註五) 『同書』八七頁。

## 十 二

本節では女性の典型な悲劇について述べる。前節で男性の典型的悲劇を概観したのも、それと対照的に女性の悲劇の本質を理解するためであった。

『男性の深い内的な宿命に比べてみると、女性の典型的な悲劇は、女性の歴史的地位または、少なくとも彼女の生のもっと外部的な社会層から発生しているのである。女性の場合には、あの言わば土着的な悲劇の原因となる、実存の根源を分割している二元論に欠けているのである。女性の生は一つのそれ自身の中に安住している価値として体験され、感じとられており、その意義がすっかり中心点に集められているので、女性の生は自己目的であるという表現でさえ、生をあまりにも分解しすぎているほどなのである。手段と目的という範疇は全面的に、男性の本

質の中には非常に深く根を下しているものではあるが、女性の本質のそれと同じ深さの層に対しては、およそ適応しかねるものである。ところがここに紛糾が生じているのだ。その紛糾とは、まさにこの女性としての存在がその歴史的・社会的・生理的な運命によって、単なる手段として取り扱われ、価値づけられ、実際自分自身でさえそのようなものと意識していることである——すなわち、男のための、家庭のための、子供のための手段というわけなのである。これは悲劇的と呼ぶよりもむしろ痛ましいと呼ぶ方がよからう。(後略)』<sup>(註)</sup>

前節で研究した男の悲劇の根本的原因是に端的に言えば、男の内的な二元論であつた。ところが女にはそうした二元論に欠けているので、男のような悲劇の原因はあり得ない。一方目的と手段という範疇も男性的二元論であつて、男の本質の中に深く根を下しているのだが、女の本質のそれと同じ深さの層にまでは届いていない。このように、女の生はそれ自身の中に生存の意義を見出しているので、本質的には手段的存在ではない。ところが女性の歴史的・社会的・生理的(妊娠・分娩・授乳などを指す)運命によって、無理やりに手段として取り扱われ、自分でもそのように意識しているのが悲劇の様相だという。これは悲劇的(tragisch)というよりは痛ましい(traurig)と呼んだ方がよからうという意味については、つぎのように述べている。すなわちジンメルによれば、真の悲劇は破壊的な運命が生内部の深いところから発している場合に存在する。ところが女の場合は、いかに破壊的な・絶滅的な運命に見舞われても、それは社会的な外部の諸力から来ているので、真の意味の悲劇的運命ではあり得ないという。であるから女の場合は痛ましい(悲しい)と呼ぶ方がよからうという。平易に言えば、男の場合は絶対に逃れられない破壊的な宿命であるから真の意味の悲劇的なのであり、女の場合は社会変革などによって逃れられ得る可能性を宿しているのだ、両者は質的に根本的に違っている、と言うのであらう。

ジンメルによれば、女性には本質的には何物かの手段的存在ではないにもかかわらず、その歴史的・生理的運命によって、男のための・家庭のための・子供のための手段的存在にさせられ、自分でもそのように意識していることに女

性の悲劇の様相を見たのであった。男との関係・子供との関係がきわめて重大な意義を持っていることは疑がないとしても、それが女性の本質的存在と本質的な関係を持つものではないということについては、すでに本研究第七節で述べた。<sup>(註二)</sup>なお女性と家庭との関係については、別章「女性文化」の中で述べられている。<sup>(註三)</sup>

以上のジンメル論述の背後には、再三述べてきたように、女性の形上的本質は閉鎖されてもいるが同時に向目的であり、統一的であり、自己完結的であり、少なくとも何物かの手段的存在ではないという女性観がはっきりと打ち出されているのである。これは女を随分祭り上げた女性観と言える。しかしジンメルにしてみれば形而上学的な物の見方からきた当然の判断なのだから、祭り上げる、上げないは問うところではないわけである。しかし、これはジンメルの女性観全般に関することなので、本研究の最終の結論のところで論ずることにする。

(註一) G. Simmel, *Philosophische Kultur*, Leipzig, 1911, S. 81ff.

(註二) 神戸女学院大学論集、第十三巻、第三号、一頁以下。

(註三) G. Simmel, *op. cit.*, S. 306ff. 『世界大思想全集、ジンメル・デュルケム』河出書房新社、昭和三四年、一五三頁以下。

### 十 三

本節は、ゲーテの言葉「女には理念をもつ能力がない」についてジンメルの見解を述べたものである。

『あの言わば必然的な悲劇は、男性の本質の中にのみ存在の根拠を持っているということが、おそらく十分に言い得るであろう。そのわけは、もしもいくぶん曖昧な表現を用いることが許されるとするなら、自然的なものが、女性のあまりにも形而上的な本質の根柢であるがために、そこには悲劇的な二元論を展開させることができないからである。男は理念のために生き、理念のために死ぬことも充分あり得るのだが、それというのも男は常に理念に相対しているのであり、理念とは男にとって永遠の課題であるわけなので、男は精神的な意味で常に孤独な者なの

である。この理念についてと理念に相對してということが、男が理念を考へることができ、また理念を體驗する唯一の形式であるがために、あたかも女には「理念をもつ能力がない」(ゲーテの言葉) ように男には見えるのである。しかしながら、女にとってはその存在と理念とが直接に合一しているものであり、運命的な孤独が偶然に彼女を支配するようなことがあつても、女は典型的には決して男ほど孤独ではない。女は常に自分自身をわが家としてそこから離れずにいるのだが、男の方はそのわが「家」をわが身の外に持っているのである。<sup>(註1)</sup>

以上は理解が比較的容易であるが、婦人問題の学徒のために、少しく筆者の言葉で説明を加えてみることにする。まず前節と前々節で述べた男女それぞれの悲劇の根源の比較から始まる。男の悲劇は男性の本質の中から必然的に湧き出るのであるが、女の悲劇は社会的に女が手段として取り扱われていることから起る。さらに形而上学的に言うならば、男の悲劇は男性の本質の二元論から来るのであるが、女の本質は、ジンメルが再三述べているように、統一性(Einheitlichkeit)にあるので、悲劇の根源である二元論が展開しないのである。男の二元的存在から、男は常に理念と相對しているのであるが、これが男をして淋しい孤独的存在にしているのだ、とジンメルは言う。そこで理念について(Darüber)と、理念に相對して(Gegenüber)とが、男が理念を考へ、理念を體驗する唯一の形式であるために、その男の形式から見ると、女にはもともと理念がないように見えるのだという。しかし、女の場合は存在と統合した形で理念を持ち合せているのであつて、偶然運命的な孤独が彼女を襲うことがあつても——結婚しようとしてできなかった老嬢とか、突然に夫や身寄りを失つた場合などを指すのであろう——、男ほど淋しい存在ではないという。つまり平易に言えば、理念とは憩の場であり、わが「家」(„Haus“)であるが、その憩いの場を女は自分の中に持っているのに反し、男はその憩いの場を自分の外側に持っているわけなのである。

ゲーテが言つた、女には「理念をもつ能力がない」(„keiner Ideen fähig“)は、いかにも女を一段と男よりも低級な存在と見下した響を伝える。しかしジンメルによれば、それは男性的思考形式で女性を眺めるからである。従

来の女性論の大部分は男の立場から見た女性論であり、自分のものだけが客観的立場から見た女性論であるとの自負がここにも垣間見られる。しかも、ここでは女性に対する弁明の役を果たしているわけである。

以上のジンメル（註二）の論述はたしかに論理的には筋が通っている。しかし、男は理念のために生き、理念のために死ぬとか、常に理念に相對しているとか、理念とは男にとって永遠の課題であるとかいう表現は、今日の一般大衆の男たちにも当てはまるのであろうか。彼等大衆の男たちでさえ理念と取り組むのが男本来の姿であるのに、現在そのように見えないのは、富に最高の価値をおく資本主義のイデオロギーに毒されているからだ、と見るのであろうか。それとも資本主義のイデオロギーそのものが一つの理念と見るのであろうか。「理念」という用語は哲学史的には、きわめて多義的ではあるにしても、この辺りのジンメル（註二）の叙述にも「ジンメルはヴィルヘルムのドイツのもとの中間層的インテリゲンチアのイデオログ」だ（註三）という唯物論的批評が出てくる根源があるのではなからうか。

男は女よりも孤独で淋しい存在であることもジンメルによってよく説明されている。また、女は独身であつたり、その環境が孤独であつたりしても、はたから見ただど淋しいものではないこともよく説明されている。しかし、一例を挙げることを赦されるならば、長らく東京女子大学の学長をつとめ、基督者でもあり、生涯独身を通した某女史が「今度生れてきたら何をなさいますか」と問われて、「今度生れてきたら結婚をする」と答えた由であるが、（朝日新聞社編『折り折りの人』）これは単なる個人的感情の告白というよりは、むしろある普遍的な真理を伝えているような気がしないでもない。（註三）

（註一） G. Simmel, Philosophische Kultur, Leipzig, 1911, S. 82ff.

（註二） 阿閑吉男『ジンメル』有斐閣、昭和三四年、八七頁。

（註三） なお、独身生活の恵みについては、新約聖書マタイによる福音書、第十九章、第二十一—二二節にある。



『それ故に、男たちは一般に事に倦<sup>あ</sup>きやすい。すなわち男の場合は、生の過程とその何らかの価値ある内容とが、女の場合のように有機的に、自明的に結びついていないからである。女たちが家庭生活上の大小さまざまな持続的な仕事のために、男たちよりも退屈しないでずんでいる事実も、深いところに根ざしている男女別に存在する性質が、外面的・歴史的に現実化したものに他ならない。女たちにとっては生の過程それ自身が——そしてこの生の過程は彼女たちにとって自然的なものの形而上の意味と密接に関連しているのだが——その性質と程度から見ても、男たちとは明らかに別の意味を持っているのである。すなわち、それは「理念」を特殊な状態で生の過程の中に閉じ込めているという意味である。』<sup>(註一)</sup>

以上は少しく難解のようであるが、普通にもよく言われていることであるが、男は物事に倦きやすく、女はその反対であることの説明である。男の生の過程 (Lebensprozess) は理念 (この場合何らかの理念に立脚しているという意味で学問・芸術・事業・社会的地位なども含めて考えるべきであろう) を自分の外側に持つという。自分の外側にあるものを追い求めるのであるから、それがうまく行くとはいかぎらない。茨の道に差し加かって、さっぱり進まない場合もあるであろう。道を誤ったことに気が付いて、振り出しに戻る場合もあろう。いわゆるスランプに陥ったり、暗礁に乗り上げる場合もあろう。完全に失敗に帰する場合もあろう。それらの度毎に、倦怠感に襲われて「まず一服」となったり、気分転換を求めて歓楽境に足を運ぶ場合もあるであろう。<sup>(註二)</sup> 要するに男の生の過程には、無駄骨やしくじりが多いのである。

ところが、女性においては存在と理念とが自分の中に同居しているがために、生の過程が自分の中のある理念と結びついて何等かの価値を実現し、すること為すことに無駄というものがない。お掃除・お洗濯・お片付け・お買物・

お料理・お針など一連の家庭内の仕事は、それぞれ別々の価値を実現するので、生の過程は充実感の連続であり、したがって退屈というものがない。その間には生まれた「おしゃべり」さえも、ある理念と結び付いたもので、同時にリクリエーション的效果をも果している。

女に家庭の難用を押しつけ、旦那様へのサーヴィス（女は男に服従するように創られたものだという理念と結びついている）を要求したりすることは、女を隷属化するもので男女同権に反するという思想は、ジンメルによれば皮相な見方であって、女性の形而上的本質が歴史的に現実化したものだという。歴史的とは社会が家庭によって構成されている歴史的段階を指すもので、ジンメルは言わば家庭肯定論者であるわけである。今日「家庭の社会化」<sup>(註三)</sup>とか極端な形では「家庭の廃絶」<sup>(註四)</sup>とかが進歩した社会形態のように唱えられている一方、どこからともなく聴こえてくる「婦人よ、家庭に還れ」の声が女性の永遠の郷愁を誘う所以も、ジンメルによれば女性の深い形而上的本質に根ざしているわけである。

(註一) G. Simmel, Philosophische Kultur, Leipzig, 1911, S. 83.

(註二) Homo ludens (遊びの人)とは主としてこういう面に現われるのである。

(註三) 女子も外に出て働らく必要から家事の大部分を社会化して家庭から一掃すること。ベーベル (A. Bebel) がこれを唱えた。

(註四) 徹底的個人主義による別居の結婚。無政府主義者ゴッドウィン (W. Godwin) がこれを唱えた。

## 十五

本節は、男性原理と女性原理の差異をジンメル一流の錯雑・繊細な論理で説きながら、純粹哲学の領域にまで及んでいる。本研究では彼の女性論の研究に必要な限度の引用にとどめる。

『(前略)このような(男性的な一筆者)二元論は、しかし女性の原理とは反するものである。女性の原理は、そ

れを純粹に考えて見ると、われわれの存在の現われの現実と、かくあるべきものすなわち理念とが、分たれていないというその一点に存するのである。しかも両者の混合のうちになどではなく、自分を考える心像に他ならぬ、破られることのない統一性のうちに存するのである。(中略) それゆえに女性は、種々様々な物事の領域において存在と理念とを一致させようとする男性の努力を、理解しないのがしばしばである。男にとっては抽象されたことの結果であるもの、すなわち、これまで二元的に分裂していたものの接合の結果であるものを、女はしばしば直接的に所有しているのである。』<sup>(註)</sup>

以上は、前節で男は事に倦きやすいのに女は倦きやすくない理由として述べた女性の本質における存在と理念との統一性について、より根本的に述べたものである。同時に次節で述べる「女性における論理の欠如」と言われるものへの橋渡しの役目をしているのである。以上の引用の中に『男にとっては抽象されたことの結果であるものを女はしばしば直接的に所有する』とあるが、英語の「女の理由」(A woman's reason)と言われるものなどもこれに相当する。好きだから好きだというふうな「女の理由」は男の考え方からすれば理由にはならないのだが、ジンメルによれば、これはこれなりにちゃんと理に適っているものであり、次節で詳論される。

(註) G. Simmel, Philosophische Kultur, Leipzig, 1911, S. 85.

## 十六

本節は、女たちは「証明する」(beweisen)ことを好まない、とよく言われていることについての説明である。

『それ故、いわゆる論理の欠如は決して一つの単純な脱落症状ではなく、あくまで積極的に決定されている女性の本性の否定的な表現にすぎないのである。そして正にこのことが、他の一つの現象にもくり返されている。その現象とは、その論理の欠如を言わば他の一つの次元へも移しているということである。女たちは証明することを

好まない、とよく言われている。』<sup>(註1)</sup>

以上のようにジンメルは、女性における論理の欠如を肯定している。女性は論理的思惟の能力に欠けていると云えば、いかにも女性の才能の欠陥を指摘しているように聴こえるが、ジンメルによればそれは男の立場から考えるから、そういうことになるのであって、女性の本性からは積極的に論理の無用が基礎づけられるのである。その論理の無用は別の次元に移されて論証無用ということになる。

そういうわけで結局ジンメルは『女は証明することを好まない』ということ肯定するのであるが、そこに至る彼の叙述は錯雑・難解をきわめ、純粹哲学の領域ともいうべき部分である。そこで筆者が平易に摘記・要約してみるに止める。

まず婦人問題の学徒に対する予備知識としては、証明 (證 *Probation*, argumentation, 演證 *Demonstration*, 證 *Beweis*) とは論証・立証などとも言われているが、「証明」は平俗な感を与え、学術的には普通「論証」が使われているようである。その意味は、与えられた判断の確実性乃至蓋然性を定めるべき根拠 (論拠・理由ともいう) を明示することである。普通の推理と異なる点は、論証においては、ある判断がすでに与えられており、唯その根拠を明示する点にある。しかし、その明示された根拠のまたその根拠とどこまでも追求して行くと、結局は最後のものは論証できないことになるわけである。この辺りからジンメルの所説に聴くことにする。

『最後のもの、これは論証することができない。なぜならば、最後のものを論証することは、最後のものが最後のものではなく、それ自身より基礎的なものの上に依存していることを意味することになるであろう。あらゆる論証のこの変更不可能な形式性の故に、女性的存在の深さにおいても、女性的存在の存在一般に対する形而上的な関連においても、あらゆる論証は女性的存在にとつては一つの不十分なものである。というのも——個々の場合が、根拠のある・理に適ったものであろうかならうが——正にこの女性的存在は基礎的なもの一般に直接に定着

しており、そのため女性はどうな論証し得る題目のうちにも、最初のものと論証し得ないものを感じとるのだ  
が、それに対して女性論証というような言わば回り道が必要ともしないし、必要とするわけでもないのである。<sup>(註二)</sup>」

最後のもの (das Letzte) とは、最も基礎的なもの・究極的なものの意であり、これが論証できないことはジン  
メルのの叙述をまつまでもなく、当然のこととされている。そこで論証ということは、それを押し進めていっても、  
結局論証できないものにぶつかって行き詰りになるのであるから、その意味においてあらゆる論証は不十分なもの  
(Inadäquatheit) と言えよう。ところが女性的存在は大変深いところにあるので、この証明のできない基礎的な  
のと形而上的に直接定着しているので、初めから証明の届かないところにいるのである。言わば、証明が行き詰りに  
なる終着駅に初めからちゃんと待っているのだから、そこに行く回り道などは無用なわけである。このようにして、  
女性における証明無用についてのジンメルのの論理はつぎの叙述で終局となる。

『女は、論理を必要とすることの彼方かなたにある本質的統一性Einheitlichkeitを持っているので、直ちに何とかして、事物そのもの  
の中に、現実を超えた真理の中に入り込むものであるから、われわれ男たちを方法論という形式ではじめて、この  
現実(註三)に導いて行くべき論証などに対しては無関心なのである。』

以上の中に真理に到達する道筋の男女差が説かれている。方法論とか論理とか論証とかの道順をふむのが男のやり  
方である。女はそうした道順を必要としない本質的な統一性 (Einheitlichkeit) を内部に持っているのだ、それでも  
って直ちに真理の世界に突入するというやり方である。したがって証明とは男の世界のものであって、女には無縁な  
ものであり、それを女が好まないのも当然だということになる。

女子大学の新聞などでよく女子学生の論旨に接するのであるが、その論調はそのものずばりと事物の急所・真相を  
突いている感を深くする。同時にそこに至る間に数多の論理の飛躍 (中間論証の欠如) を発見するのであるが、それ  
も前述のジンメルのの論述によれば、当然納得の行く事柄である。

(註一) G. Simmel, Philosophische Kultur, Leipzig, 1911. S. 86ff.

(註二) *ibid.*, S. 87ff.

(註三) *ibid.*, S. 89.

## 十 七

通常女は男よりも道徳的でない、と多くの学者によっても言われている。それが端的には、英語の「徳」(virtue)が語源的には、ラテン語の「男の秀性」(virtus)から来ていることに現われていると言えよう。つまり男らしいということは道徳的ということであり、女はどうもそうではないらしいのである。この問題については拙稿「ショーペンハウエルの女性論(中)」<sup>(註二)</sup>で概論を試みたこともあり、この問題は女性論中の最大の問題とも言えるのだが、ここでは主としてジンメル<sup>(註一)</sup>の立場から考察してみることにする。

ジンメルによれば、前述の女性の統一性ということは論理の領域においてもさることながら、倫理の領域においては、完全に・最も意義深い生命力を持っているという。それは結局は女性について言われた有名な言葉「美しき魂」ということになるのであるが、それを理解する前提として男性的二元論的思想家ヴァイニング<sup>(註二)</sup>の女性観をつぎのように掲げている。

『それ故にヴァイニング<sup>(註二)</sup>のような極度に男性的二元論的思想家で、男性的な理想的人柄と人間としての理想的な人柄とを無邪気に混同する思想家は、正にこの倫理的な観点において、女性の本質が絶対的に無価値であることを証明しようとしたのである。しかもそのやり方は徹底的に論理的であって、女性の本質は彼の目には悪または不道徳(unmoralisch)に見えるのではなく、およそ倫理的な問題とは無縁な・単に無道徳的な(amoralisch)ものと見えるのである。』<sup>(註三)</sup>

男性的二元論を倫理の領域に適用するならば、人間の内部における善悪（靈肉）二元の対立を前提として、善が悪を克服することによって人間は道德的に（人間としても）進歩向上すると考えるのが男性である。その男性的思考方法で女性を考察しても、前述の女性の本質の統一性の故に、善悪二元の対立は見られないわけである。したがって女は善いこともできないれば悪いこともできないし、倫理道德とはおよそ無縁な存在ということになる。ヴァイニンガー自身の手紙によれば、「私はことさらに女が邪悪であり、反道德的であると論ずるのではない。むしろ女は真に悪人たることはできないと云うことを主張するのである。女は単に無道德なのである。」<sup>（註四）</sup>

しかしジンメルは男性的二元論的倫理觀をそのまま女性に適用するというふうな、ぎこちない哲學者ではなく、女性を客觀的（即物的）に考察することのできる思考の柔軟性・視野の広さを持っていた。それはつぎの引用に現われている。

『しかし道德的命令と自然に働らく衝動との間の二元性の上にのみ道德的生活の可能性が基礎づけられるものではない。それを示しているものが美しき魂と呼ばれる現象である。美しき魂の特徴は、道德的行動が相反する動機 of 克服を先ず必要とするというふうなものではなく、一つの闘争のない衝動から自明なものとして湧き出てくることにあるのだ。美しき魂にとっては人生は言わば一系列であって、彼女は初めから、なすべきことのみを欲するのである。』<sup>（註五）</sup>

ジンメルによれば人間の道德生活の可能性は、善による惡の克服の上にのみ基礎づけられるとするのは男性的思考方法からくるもので、道德生活の可能性は他にもある。それはいわゆる「美しき魂」と呼ばれる現象であるとして、その特徴をあげている。

さて「美しき魂」（die schöne Seele）についてであるが、これはドイツで古くから言い慣らわされた合言葉・常套語のようなものであったらしい。<sup>（註六）</sup>しかしそれは単なる言葉ではなくして、「美しき魂」の名にふさわしい女性が歴

史的に数多く実在したことを物語るものと言える。それを最初に学問的に取り挙げた文献が、ドイツの詩人・劇作家シラー (Schiller) の美学論文『典雅と莊重』(Über Anmut und Würde, 1793) で、その中では主としてカントの言わゆる「嚴肅主義」との関連において論ぜられているようである。つぎの文献は、ゲーテの『美しき魂の告白』(Bekenntnis einer schönen Seele)(ウィルヘルム・マイスターの修業時代——Wilhelm Meisters Lehrjahre, 1796 第六篇)である。これはゲーテが実際に接触した「美しき魂」クレッテンベルク嬢を題材として書かれたものと言われている。つぎにジンメルがこの論文で「美しき魂」の形而上的・論理的基礎づけを与えている。日本人の研究としては、深田康算博士『美しき魂』がある。こういうわけで「美しき魂」そのものが一つの研究課題なのであるが、ここではジンメルの叙述を主として論をすすめる。

『さて、すべての自己克服はつぎの自己克服を容易なものにし、不道德と戦って常に成功をおさめることは不道德を弱めるという成果を常に伴うものであるから、直接の自然的衝動そのものが道德的なものへ向って成長してゆくのである。この変形が完成された場合、本来二元的であったものが美しき魂という統一的なものに変るのである。しかし美しき魂のもう一つの形式は、まず二元性などを克服する必要もなく、本来の内的原理として統一的なものを持っているのである。戦いの代償や克服された対立の代償としてではなく、本来分裂しない意志の生そのものとして、理念が内部で自らの統一を保有していることはあり得ることである。(中略)後者が、男の側にも女の側と同様に実現される倫理的典型のうちで、女性の根源的本質と最も深く結合し、また女性の根源的本質の生の形式から直接展開される典型なのである。』<sup>(註七)</sup>

善行の主要な報酬は次の善行を生むことであり、このようにして善行が日常の習慣になるのでなければ、道德は板についた本物ではない、というふうなことがよく言われるが、こうしたことを哲学的に表現したものが、以上引用の前半である。すなわち、初めは自己克服(善による惡の克服)から出発しても、やがて即座の自然的行為がそのまま



道德的行為となる段階にまで成長することがある。この変形 (Umförmung) が完成したとき、すなわち従来の善悪の二元性の対立が克服されたとき、美しき魂が形成されるというのである。弁証法的に言うならば、善悪の二元性が止揚されて、より高次の「美しき魂」の段階へと発展したものと見えよう。

ところが、「美しき魂」の特徴はそれが自然的なところにあるとされているようである。たとえば深田康算博士によれば『『美しき魂』が吾々の憧憬の対象となる所以は、それが魂なるが故に、美なざる故に——而して自然なるが故にである。』と述べている通りである。しかしジンメルによれば前述のように、二元的闘争の段階が次第に止揚されて、完成するに至った「美しき魂」もあることになる。ジンメルの方がより詳密であり、より現実的であるように思われる。

前記引用の後半が、言わば天成の「美しき魂」の形式である。理念が内部で二元性に分裂されない統一性を持っていて、そこから流れ出てくるものが、すべて善(聖)であり、美である。なお、ゲートは聖の面(魂の面)を強調し、シラーは美の面を強調していると言えるようである。したがってここでは、二元性の克服とか努力とか精進とかは一切不要である。天成の麗質をそなえた気高い婦人の魂とでも言えよう。

さて「美しき魂」とは女性の独占物なのか、ということが次の問題である。前述のゲーテの『美しき魂の告白』の主人公は女性であつたし、ジンメルは言わゆる「女性の倫理性の欠如」を弁護するかのように「美しき魂」を持ち出しているところから見ても、これはどうも女性の独占物であるかのように思わせるものがある。これに答えるものが、やはり前記の引用文である。すなわちジンメルによれば、前述のように「美しき魂」には二つの形式がある。一つは、通常靈肉(二元性)の闘争・自己克服・道德的努力・精進とか言われている過程を経て、高度の道德的次元に到達する形式である。これは女性にもないことはないが、主として男性的形式と言えよう。他はそうした過程を必要としない言わば天成の「美しき魂」であり、これこそが女性の根源的本質と深く結合して統一体を形成し、そこか

ら直接流れ出て来る形式なのである。要するに前者は主として古来各宗教に数多く輩出した聖人（男）の場合であり、後者はもともとそれが自然なものであるから、無名の女性にも無数に現われたことであろう。何時とはなしに「美しき魂」という言い草・合言葉が生れた所以も、そこから説明され得るであらう。

「美しき魂」と呼ばれる現象の根源である女性の統一性について、ジンメルはさらに形而上的思考をすすめ、つぎのように述べている。

『男性に特有な二元論——それをわれわれは、十分な表現とはいえないが「官能の幸福と魂の平安との間」の二元論と称しているのだが——に代るものに女性的自然があり、それを心理的・歴史的な諸々の混乱・紛糾が男性的二元論の中へ巻き込むこともしばしばあるが、それでもそれはその固有の本質にしたがって、一種の統一のある内的導きの役割を果たすのである。つぎに、こうした主観的な、すなわち魂の奔流の中で純粹に主観的に支配力を揮う統一性は、女に見受けられることの方が男に見受けられることの方よりも無数に多く、しかも板について見えるのだ。しかも女は男よりもその統一をよく意識している。ここに言う統一とは換言すれば、自分自身との間に或る決着がついていることであり、さらに言えば、自分自身の内部で自分に反対の提訴をすることによって妨害されずに、あたかも植物がその枝をのぼし、その実を結ぶように自然に行動することであり、また、そうあらねばならず、そう行動しなければならぬといった場合も、本質の流れがすべて自ら一定の方向に向かって進むので、自らは無邪気な自由を意識していることなどである。』

以上は、男性的二元論に対する女性の内的統一性について繰り返し詳細に論じているので、理解は容易であらう。端的に言えば、男の世界は二元的闘争の世界であり、女の世界は自然に内的統一性をそなえた世界である。実際にも、男は老年になっても人生觀的悩みを悩む人が多いように見受けられるのに反し、女は自分自身との間に決着がつき、落ち付きを保っているように見受けられる。男よりも女の方が得な性分である、と云えそうである。

なお、前記引用の初めのところで、『それを心理的・歴史的な諸々の混乱・紛糾が男性的二元論の中へ巻き込むことともしばしばあるが』と述べている箇所は、ちょっと理解が困難のようであるが、これは男性優位の社会が女性に対して圧力を加えた歴史的環境などを指しているものと思う。日本の例で言えば、江戸幕府の封建的基礎が揺らぎ出した幕末において、それが女に対しても教訓流行りの世相となって現われた。そうした教訓が逆効果となって現われた諸々の女の姿を描いた浮世絵師歌麿の「教訓親の目鑑」と題する揃物の作品がある。ついでに言えば、これは教訓に名をかりたフェミニスト歌麿の女性観による社会批判でもあった。

倫理の領域における女性の内的統一性の論理はさらにつづいて次のように述べられる。

『二元論的倫理が女性の劣等性として宣言していること、すなわち彼女たちは男たちよりも素朴的に行動し、大抵の場合男たちよりも良心の満足を持っていること、これは、彼女たちにおいては存在と当為が分離していないことから来ているのである。実践の本質が内的に分裂していないということは、必ずしも道徳的に価値のある理念を實現しなければならぬというわけのものではない。それはあたかも別の過程、すなわち二元的・男性的過程が必ずしもその理念を實現していないのとよく似ている。内的に分裂していないということは、「美しき魂」の言わば形式を示すだけであって、必ずしもその魂の内容を示すものではないのである。しかし、女性に特有な種類の倫理的なものが存在するところでは、それはあの存在の統一性すなわち自分自身と理念との統一性から湧き出てくるものに違いない。そこで、道徳性の女性的存在状態の特殊性については、おそらくつぎのように言えるであろう。すなわち、道徳性は女の場合は男の場合よりも、主観的にはより、確実ではあるが、客観的には心もとなないものである。』<sup>(註七)</sup>

以上は本節の女性と道徳に関する問題に対するジンメル<sup>ジンメル</sup>の結論的部分である。これまで女は一般に男よりも道徳的でないと非難されてきたのは、男性的・二元論的倫理観の立場から女性の素朴性（統一性）を眺めるからであるとい

う。これは女性においては存在 (Sein) と當為 (Sollen) が分離してゐること (Ungeschiedenheit) から來てゐるのだと、ジンメルは言う。なお、ジンメルは別のところで、自分<sup>(第十一)</sup>はしきりに女性的存在の統一性という積極的表現を用いるが、それと同じことが一般的には、未分化性・未分離性・客観性の欠如などと消極的 (否定的) に表現されている、と言っている。それというのも、言葉は主として男の物の考え方で作つたものであり、その男の言葉で女を表現するからだという。この辺にもジンメルの物の考え方が、いかに即物的であるかを示していると思う。

ジンメルによれば倫理観はすべて二元論の上に成立するとは限らないし、女性のような統一<sup>かた</sup>的な行き方もあるといふ。その上ジンメルによれば、立派な道德生活を実現することは、その倫理観が二元的であるか、一元的 (統一的) であるかとは無関係だといふ。すなわち、二元的倫理観を持つ男でも、その道德生活がさっぱり駄目な事例も沢山あると同様に、倫理的行き方が一元的 (統一的) であるからと言って、そこから当然立派な道德生活が生れて來るとは限らない。例えば「美しき魂」の特徴は、それが二元的闘争の過程を経ずに一元的統一性から自然に流れ出て來るといふ形式性にあるのであって、勿論すべての女が現実に「美しき魂」を持っているというわけではない。

最後に女性の倫理的行き方の特殊性については、ジンメルは自身が男であるせいか、断言的に言うのをはばかつてはいるが、自己自身と理念との統一性から湧き出て來る關係上、倫理の面でも主観性が強く客観性に乏しいらしいと言っている。これを平易に言えば、一般に女は男よりも人柄 (人格) は立派であるが、正義感 (道德の客観的方面) には乏しいということで、J・Sミルなど広く学者の認めるところである。

最後に、倫理・道德と女性との關係についてのジンメルの論述を要約してみることとする。まず第一に男性的倫理観にすぎないものをそのまま汎人間的 (allgemein menschlich) なものとして女性にも適用する考え方を排斥している。ジンメルによれば、この考え方から、女は一般に男よりも道德的でないという判断が生れたのである。男性的なものにすぎない価値基準を男女別を問わない汎人間的なものとして通用させている人間社会の実状については、それ

が道德の領域に限らないことは、すでに本研究(一)の初のところでも述べた。<sup>(註十二)</sup>このことをより、根本的に言えば、客体を向自的(für sich)存在として見る哲学者としてのジンメル<sup>(註十三)</sup>の態度から来ているのである。彼の譬喩的表現によれば、「女性の心臓の鼓動」を聴き分けようとする態度なのである。

つぎに、男性的二元的倫理と女性の言わば統一的倫理とは別であるというふうなことは、哲学者の単なる思弁の産物ではないことを証明しようとした。そのために取り挙げられたものが、ドイツでは言草とまでなっている「美しき魂」と呼ばれる現象形態であったのである。それを裏付けるかのような歴史家ギボン(gibbon)のつぎのような記述もある、「ゲルマニア人は彼等の妻を尊敬と信頼の念をもって取り扱い、重要な折りには、すべて妻に相談をかけ、彼女の心には聖なるもの・人間以上の智慧が宿されていることを信じて、いとおしく思った。」<sup>(註十三)</sup>

(註一) 神戸女学院大学論集、第四号、三四—九頁。

(註二) Otto Weininger (1830—1903) オーストリーの思想家。大休において女性の劣等性を主張し、女は男からではなく女性自身から解放されねばならぬという婦人解放論を説いた。

(註三) G. Simmel, Philosophische Kultur, Leipzig, 1911, S. 89.

(註四) Otto Weininger, Geschlecht und Charakter, 1903. 村上訳『性と性格』春秋社、昭和九年、二〇二頁。

(註五) G. Simmel, op. cit., S. 89.

(註六) 深田康算『美しき魂』弘文堂、昭和二八年、三七—八頁。

(註七) G. Simmel, op. cit., S. 90.

(註八) 深田康算『前掲書』四四頁。

(註九) G. Simmel, op. cit., S. 91.

(註十) ibid., S. 91.

(註十一) ibid., S. 281.

(註十二) 神戸女学院大学論集、第十二巻、第一号、六一—七頁。

(註十三) John Langdon Davies, A Short History of Women, London, 1948, p. 155.

Katsuo Ishizuka

## A Study of G. Simmel's View of Womanhood (4)

### Résumé

The typical tragedy of the male lies in the difficult proportion of finite performance to infinite requirement.

The typical tragedy of the female occurs from her historical situation: that is, she has been treated only as an instrument for serving the male, household business and the upbringing of children by her historical, social, physiological destiny.

In the case of the female her being and her idea constitute a single entity, but in the case of the male his idea is distinct from his being. From this male view-point, it might well be said, as Goethe said, that "women are unable to have any idea".

The male gets tired of things soon, for he pursues an idea which is not always caught on account of its being beyond the bounds of his thinking. But the course of woman's life is tied to her idea which is within her capacity. Therefore, her life goes without any sense of boredom.

It has been said that women do not prove anything willingly: that means a lack of logic in women. But women can directly catch the ultimate basis of things and so need not go by a roundabout way of "logic".

It is said that women are inferior to men in morals. But moral life does not always depend on a manly dualism in which goodness subjugates badness. Women stand on an ethical monism, the typical phenomenon of which is commonly called "a fair soul", in German, "die schöne Seele".